ウォーターボーイズ

tensuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウォーターボーイズ

【Ｎコード】
Ｎ７６９７Ｃ

【作者名】
ｔｅｎｓｕｋｅ

【あらすじ】
スイミングスクールのコーチに憧れる高校生赤星昇の恋心を書きました映画「ウォーターボーイズ」の玉木宏さんをコーチのモデルにしています

1．スイミングスクール（前書き）

アフロヘアの佐藤君ではなくて
さわやかな玉木宏さんで脳内変換して頂けたらと思います

1．スイミングスクール

「赤星ぃ～っ！おぉーい！のぉぼぉるぅ～っ！おいっったらぁ～っ！」
僕はフルネームを絶叫されて　仕方なく立ち止まった。
「・・・なんだよっ・・・・」
「お前　歩くの速すぎっ！で　どこ行くんだよぉ～」
同じクラスの金子だった。　僕　赤星昇と　この金子翼は幼稚園時代からの友達だ。
「プールだよ・・・悪いかよ・・」
僕が吐き捨てるように言うと　金子は少し眉をひそめて僕を見た。
「のぼる　高校受験するんだろぉ？マジそろそろ勉強に専念した方がいいんじゃないの？」
「勉強もしてるから大丈夫だよ・・・人の心配してないで翼は自分の事だけやってろよ」
「のぼるぅ～・・・お前愛想なさすぎっ！」
振り切るように早足で歩き出した僕を　一瞬追うように足を出した金子だったが
小さく首を横に振りながら　その場に立ち止まった。
僕は金子を置き去りにして　足早にその場を去った。

夏休みが終わり　二期生の学期末の試験の初日だった
９月に入っても空には入道雲が真夏のように大きな顔をしている
中三の夏休みは塾の講習であっという間に過ぎ去った
それでも僕は毎日プールへも通った
学校の水泳部は引退した　でも僕は泳ぐことをやめていなかった
僕は金子を置き去りにして　学校から通い慣れたスポーツジムへ向かった。

「おおぉ～っ！のぼる！早いな　もう学校終わったのか？」
ジムの入り口で僕に声をかけてくれたのは　スイミングスクールのコーチだった。
「あっ・・佐藤コーチ・・はいっ！今試験中なんで早いんです」
「試験中にプールに来たのかぁ？余裕だな（笑）」
「気分転換と体力維持のためですよ」
「１５歳位で体力維持もないだろう（笑）」
「いやいや　今からやっとかないと」
「お前　口数少ないのに　ホント面白いよな　ははは（笑）　早く着替えてこいよぉ～」
コーチは笑いながらスタッフルームに入っていった。

僕が彼　佐藤宏に初めて出会ったのは　僕が７歳の時　そう　小学校１年生の夏休みだった。
どうにも水がニガテで学校のプールにも泣きながら入っていた僕を見かねた母が
無理矢理申し込んだスイミングスクールでの担当のコーチだった。
当時　まだ大学生のアルバイトだった彼は　泣き続ける僕をレッスンの間
ずっと片手に抱きかかえたまま　他の生徒たちを教え　僕に決してプールに入る事を無理強いしなかった。
僕は彼の胸にしがみついたまま　かれこれ２ヶ月近く　それでも毎週プールに通った。
そして　少しずつ少しずつプールに慣れ　友達もでき　僕はようやく水泳をちゃんと習い始めた。

毎週　友達と一緒に泳ぐのが楽しくなり　どんどん上達していくとまた一層水泳が好きになり、
そうして　僕はプールへ通い続けた。　かれこれ８年になる。
当時１９歳だったコーチも大学を卒業し　そのままこのジムのコー

チとして就職し
今は２７歳になっている。
僕はいつの頃からか　彼に憧れていた。　彼の姿が見たくてプールに通っていた。
彼の泳ぐ姿はたまらなく格好良かった。僕の目標だった。

「のぼる　背が伸びたよなぁ～　今どの位ある？」　プールサイドにいた佐藤コーチが僕に声をかけた
「１７２か３位だと思う・・・」　僕はゴーグルに曇り止めを塗りながら応える
「へぇ～　まだ伸びそうだな」
「コーチ　抜きますから」
「俺１８０あるぞ・・でも・・そーだな　今に俺よりでかくなりそうだよなぁ　お前足とかデカイもんな」
コーチはそういって　がははと笑う。
彼は豪快に笑っても　今風にちょっと崩れた言葉遣いをしてみても不思議とその優しい穏やかな雰囲気が変わることがない。
彼はいつも人なつっこい笑顔で　生徒にもその父兄にもとても人気がある。
そして　誠実で真面目な性格と熱心な指導で信頼も厚かった。

「昇は記録会出るのか？」
「いえ・・・来年受験なんで　今はちょっとまとまった練習できないし・・・」
「そっか　どこ受けるんだ？」
「Ｋ大の付属です」
「へぇ～っ！俺あそこの卒業生だぞ」
「えっ？マジですか？」
「マジ（笑）で大学もそのまま行った」
「そぉなんだ・・へぇ・・」

「勉強見てやろうか（笑）」
「えっ！！マジ？？」
「マジ（笑）今度　参考書とか持ってこいよ　空き時間に見てやるよ」
「やったぁ～っ！ありがとー！」
「あの泣き虫昇が高校受験かぁ・・・感慨深いね」
そういってコーチは僕の顔をにこにこと見つめた。

彼はとても端正な顔立ちをしている。
ベビースイミングに小さな子供を連れて通ってくる若いママさんたちは
彼の事をアイドル歌手か若手俳優でも見るような目で見つめる。
彼は子供好きで子供達にもとても人気があるので　ママさんたちの視線は一層熱くなる。
当の本人は全くといって　そういった熱い眼差しには興味も関心もないようだった。
というよりも　そもそも　そういった事柄に気づいてさえいないようだった。
中学生の僕でさえ気がつく熱烈な視線なのに　彼は見えないバリアーにでも囲まれているのか？
そんな　ちょっととぼけた呑気な天然具合も彼の大きな魅力だった。

すっきりとした細身に見えて　肩幅が広く腕のつけ根などがっしりと太い。
厚い胸板と真っ平らな腹筋はキレイに引き締まって　細い腰から真っ直ぐな長い脚が伸びている。
とてもバランスのよい均整のとれた体格をしている。
腿の真ん中あたりまである競泳用のぴったりとした水着が嫌味無くとてもよく似合う。

そして彼の顔立ちは一見　とても優しそうな穏やかで可愛らしい感じに見える。
年齢より若く見られる事も少なくないだろうと思う。
それは　長い睫に縁取られた黒目の大きな真っ黒でキラキラした瞳がご丁寧に少しタレ目気味だったりするせいかもしれない。
この大きな真っ黒な瞳と　いつもお化粧でもしているのかと思うほどに紅く見える
ふっくらと　男にしてはぽってりと厚めの唇が　彼をどこか中性的な美人顔に見せる。
ご丁寧にも　笑うと　頬にくっきりとえくぼが浮かぶ

でも　細く真っ直ぐな鼻梁と綺麗な形の眉が　指導中の彼の表情を引き締める。
熱心に子供達に指導をしている時の彼は　とても凛々しく　少女めいた美貌が
不思議とそのなりを潜め　精悍な年相応の青年に見える。
こんな不思議なギャップも僕にはたまらなく魅力的だった。
こんなヒトになりたいと　いつの頃からか強く想い憧れるようになっていた。

僕は時折　こっそりと彼の髪型を真似てみたりもしていた。
中学に入り　すっかりスイミングスクールでの指導内容レベルは卒業する程に上達した後も
僕は母に無理を言って　ジムのプール会員にしてもらった。
そして　彼に会うために　彼の姿を見るために　僕はせっせと学校帰りにプールへ通った。
クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライ　４種目　どれでもそつなくこなせる程に
あの　水が怖いと泣き続けた僕が水泳をマスターできたのは
何と言っても　彼のおかげだったと思っている。

泣き続ける僕を　その片手で抱き上げたまま　１時間１０分のレッスンをし続けてくれた
彼の存在なしには　今の僕はなかったと思っている。

僕はこの日　２５メートルのプールで　３キロほど泳いでから家に帰った。
フリーのコースを泳ぐ僕の横で　彼はおば様たちに囲まれてレッスンをしていた。
大人のクラスも彼の担当する時間帯はいつもとても賑やかでヒトが多い。
分け隔て無く誰にでも変わらず接する彼の人柄が人気なんだろうと思う。
一人っ子の僕は彼を兄貴の様に慕っていた
兄貴のように・・・その頃　僕はまだそう思っていた・・思おうと・・していた。

1．スイミングスクール（後書き）

大好きな映画「ウォーターボーイズ」からイメージして書いています

プールにこんな素敵なコーチがいたら　ワタシも日参すると思います

コメント・感想など頂けますと励みになります

よろしくお付き合い下さいませ

2. 受験生

「のぉぼるぅ～　またプール？」
「ああ　金子は？図書館？」
「うん・・・そのつもりだけど・・・プールってまだ佐藤コーチいるの？」
「えっ？」

僕はいきなりその名前を出されてちょっと狼狽えた。
何故　彼の名前を聞いてそわそわと何か後ろめたい気持ちにも似た気分になるのか
自分でもよく判らなかった。
「ああ　大学卒業して専属コーチでずっといるみたいだよ」
みたいだよ・・・自分でも何故そんなそらぞらしい言い方をするのかよく判らない。
ただ　金子がどうしてそんな事を急に言い出したのか　それが気になって仕方がなかった。

「そーなんだ　俺も昇と一緒に水泳続けてればよかったなぁ・・・」
「え・・ああ　ああ　そう・・そうだな」
金子は僕と違って　1年生で一緒に入ったスイミングスクールで最初から随分と優秀だった。
僕が佐藤コーチの腕に抱っこしてもらっている2ヶ月の間に
金子は次々と進級テストに合格して　沢山の認定の缶バッチをもらい
僕がようやく水に顔をつけられるようになる頃には　すっかり上級クラスに混ざっていた。
そんな訳で　金子は早々と　小学校の高学年でスイミングスクールを辞めていた。

「今度　昇がプール行く時　見学に行ってもいい？」
「見学？・・・別にいいけど・・・」
「やったぁ　じゃ　今度ね　ばいばい」
金子は笑顔で手を振って図書館の方へ歩いていった。
僕は　金子が言った　見学という言葉と佐藤コーチの名前がやけに頭にこびりついて
一体どういうつもりなのか　気になって仕方がなかった。
プールに着くまで　ずっとその事ばかり　ぐるぐると結論のない思考に浸っていた。

「昇っ！前見てないと危ないぞっ！」
ジムの入り口で後ろから肩を叩かれて　僕は我に返った。
振り向くとそこにいつもの爽やかな笑顔があった。
「佐藤コーチ・・・」
「おぅっ！今日も泳ぐのか？毎日エライなぁ～」
「はい・・・習慣・・みたいなもので・・」
「そうかっ！　じゃな」
彼は白いポロシャツに短パン　素足にサンダルといったいでたちだった。
入り口付近にいた　他のジム会員たちにも笑顔で挨拶をしながら
彼はスタッフルームへ入っていった。

僕はその日　朝から　実は少し身体がだるかった。
試験最終日と言うこともあり　無理をしてでも学校へは行ったものの
本当はプールへ行くのは　今日はやめておこうかと思っていた。
でも　金子に声をかけられて　ついプールへ行くと応えてしまい・・
そのまま　本当にプールへやってきてしまった。
少しぼんやりとしながら　僕はロッカーで水着に着替えプールへ出た。

フリーで泳ぐ人のためのコースには僕の他に誰もいなかった
僕はゆっくりとしたストロークのクロールで泳ぎ始めた。
５０メートルのターンをして少ししした頃　僕は身体がずっしりと重くなり
手足が思うように動かなくなるのを感じた。
（・・・やばいっ？）そう思った時には　僕は上から何かに押さえ付けられたように
ごぼりと水を飲んで　水中に沈んだ。
苦しくて　もがきたいのに身体が動かない。
うっすらと開いた僕の目に　ゴーグル越しに誰かの顔が迫るのが見えた。
なんだか懐かしい気持ちになる腕に抱えられた。
僕の意識はそこでとぎれた。

目が覚めた時　僕はジムの救護室のベッドに寝かされていた。
まだ水着のままで　タオルケットを掛けてもらっていた。
救護室の女性が「大丈夫？」と僕に水をくれた。
「・・・僕・・・」
「風邪でもひいてるのかしら？少し熱があるみたいよ　無理しない方がいいわね」
白衣の女性は僕に優しい笑顔でそう言った。
「すみませんでした」
「佐藤コーチが運んでくれたのよ　帰りに挨拶していきなさいね」
「・・・はい　ありがとうございました」

僕は救護室でジムのバスローブを借りて　シャワー室へ向かった。
まだ少しふらふらする足取りで　頭もぼんやりしたままだった。
何とかシャワー室にたどり着くと僕は水着のまま頭から熱いシャワーを浴びた。
目を閉じて熱いお湯を浴びながら　僕は再び軽い目眩に襲われた。

膝からがくりと崩れ落ちそうになった時　僕はまたあの腕に支えられた。
「おっとっ・・大丈夫か？」
彼だった。

「・・・す・・すみません」
「そこにタオルがあるから　着替えて座って待ってろ　家まで送ってってやるよ」
「えっ・・いや・・大丈夫です」
「ばかいえっ　そのままふらふら帰ったら途中で車にはねられるぞっ　待ってろ」
「・・・はい・・・」
僕は言われた通り　入り口あたりにかけてあったタオルを肩から羽織った。
「あ・・・でもこれ僕が使っちゃったらコーチは・・」
いいかけて振り向いた僕の目に　水着を脱いでシャワーを浴びるコーチの姿が映った。
僕はその後ろ姿に魅入られたように視線が外せなくなった。

広い肩　綺麗な筋肉となめらかな肌に覆われた見事な逆三角形の精悍な背中
そして細い腰に続く　引き締まって形のよい尻と　そこから伸びるすらりとした長い脚
なんてキレイなんだろう・・・・
いつか美術館で見たことがある　ギリシャ彫刻の彫像のようだ。
黒くて柔らかそうな髪が濡れてその端正な顔にかかる。
僕の視線に気づいてか　シャワーのしぶきの中でふと彼がこちらに目を向けた。
僕は自分の顔が熱くなり　火照り　きっと真っ赤になっているに違いない　と思った。

それでも僕は彼から目が離せなかった。
「すぐ終わるから」
彼はただそう言った。

「昇の家の住所はっ・・と・・」
彼は車のナビに僕の住所を入力していた。
「すみません・・・ご迷惑おかけします」
「なに言ってんだか　ちょうど今日はもう俺のクラスないし　帰り道だよ」
「・・・ありがとうございます」
彼の車高の高い大きな車の助手席は見晴らしが良く快適だった。
僕は相変わらず顔が熱くてなんだか照れくさかった。
彼の裸を見てしまって赤くなっていると思われるかと・・・。
「昇　絶対　熱出てるぞ　顔赤いし　さっきもふらふらしてたし
明日はプール来るなよ　受験生が体調崩したら洒落にならないぞ」
彼はハンドルを握り　前を向いたままそう言った。
僕は小さく「はい」と応えるのが精一杯だった。

「ありがとうございました」　僕は彼の車を降りながら頭を下げた。
「おうっ！　大事にしろよ」　彼はにこっと笑った。
その時　玄関を開けて僕の母が出てきた。
「佐藤コーチ！ご無沙汰しておりますっ！なんだか昇がご迷惑をおかけして・・」
どうやらジムから先に連絡が入っていたらしい。
コーチは車のエンジンを止めると運転席から降りて母に頭を下げた。
「いえっ　こちらこそ　昇君が体調悪そうなのに気がつかなくて申し訳なかったです」
「まぁまぁそんなぁ～　ね　佐藤コーチ　晩ご飯食べていらっしゃいよ（笑）」
「えっ？いいんすか？嬉しいなぁ～　ホントに？」

こういうところがこの人の可愛いところなんだと思う。
僕の母も　当然　この若くてハンサムなコーチの大ファンである。
彼は家の前に車を止めなおすと　にこにこと僕らに続いて家に上がった。

父の帰りは毎晩遅く　この日も母が携帯のメールで佐藤コーチの事を伝えたが
よろしく伝えてくれ　との返信があっただけで　夕食は僕と母とコーチの3人で食べた。
母はジムからの電話の後　急遽追加したらしい　ちょっと豪華なおかずを用意していた。

「佐藤コーチ　おいくつになられました？」　母の問いかけに
「27になりました」　彼は口いっぱいにほおばっていたモノを急いで飲み込むと応えた。
「まぁ～っ！でもそうよね　あの昇がもう15ですものね・・・」
「K大の付属を受験されるそうですね」
「ええ　どうなのかしらね　ギリギリ圏内ってこの前の模試で判定でてたけど・・」
「佐藤コーチ　卒業生なんだって」
「あらぁ！そうなの？優秀でいらしたのねぇ！」
「いやいや　そんな事はないですけど　あそこは水泳部もありますし　楽しいですよ」
「昇！佐藤コーチの後輩になれるように頑張らなくちゃ！」
「・・・判ってるよ・・・」
僕は正直あまり食欲もなく　二人の会話をぼんやりと聞きながら
箸で皿の上のおかずをただ　なんとなくつつきまわしていた。
佐藤コーチは気持ちの良い食べっぷりで　母が用意したおかずをきれいに平らげた。

食後にコーヒーでもとすすめる母に丁寧に礼と辞退を述べると
彼は「昇君もまだ辛そうなので　早く寝かせてあげて下さい」と言って
僕に「またな」と手を振って帰って行った。
彼の車が走り去るのを母と二人で見送った。
そのあと　僕は自分のベッドであっという間に眠りに落ちた。
夢も見ず　夜中に起きる事もなく　僕は翌日の昼まで爆睡した。
明け方　様子を見にきた母が　僕の額をさわって熱がある事を確認し
学校へ欠席の届けをしてくれていた。
僕は学校を休んで　部屋で寝て過ごした。

夕方近くなって　携帯に金子からメールが入った。
今日の授業の分のノートは後日コピーで渡すから心配しないように
という内容だった。　簡単な礼のメールを返信した。
母が作ってくれたお粥の夕食をなんとか食べて　僕はその日も早々
と寝床に潜り込んだ。
熱が下がり　少し楽にはなったものの　まだ身体がだるく　頭が重
かった。

うつらうつらしかけた時　また携帯にメールの着信音がした。
見ると　それは同じクラスの女子からのメールだった。
彼女は僕にバレンタインのチョコレートをくれた女の子達の一人だ
った。
メールは　昇君が休むと女子達がみんなとても心配している　早く
元気になって下さい
そんな内容だった。
僕なんかのどこが「格好いい」とか「可愛い」とか言われるのか
さっぱり判らない
僕はぼんやりと　昨日目撃してしまった佐藤コーチの後ろ姿を思い
出していた。

格好いい男っていったら　ああいうのだろ・・・・
いつの間にか　僕は睡魔に連れ去られた。

3．お見舞い

3．見舞い

翌日　母は僕にもう一日学校を休むよう言い残すと　夜には戻ると出かけていった。
僕は一人　部屋着のスウェットから着替えもせずに　家でごろごろと過ごしていた。
昼前になり　何か食べるモノがないかと台所をあさっていると　玄関のチャイムが鳴った。
インターホンに出ると　そこに佐藤コーチの姿が映っていた。
「ど・・・どーしたんですか？コーチ」
「ばぁ～か　見舞いに来たに決まってるだろうが・・・玄関まで出られるか？」
「あっ・・はい　今行きます」
僕は慌てて玄関のドアを開けに行った。

「ほい　見舞い　プリン好きだったのって　さすがに小学生の頃までか？」
「あ・・いや　今も結構好きです　ありがとうございます・・・」
「おう　随分顔色良くなったな　安心した（笑）じゃな」
「えっ！・・・もう　帰っちゃうんですか？」
「あ？いや　だって昇まだ具合悪いだろ？ちゃんと寝てろよ」
そう言って手を振って帰ろうとする彼に僕は自分でもびっくりするほどの声で
すがるように　「ちょ・・ちょっと位　時間ないですか？あがって
って下さいっ！！」
と　懇願するように言った。

彼は仕方がないなぁ　といったほのかな笑顔でうなづいた。
「ははぁ～ん・・お前　一人だろ・・お袋さんが留守で寂しいんだろぉ～（笑）」
からかうように言う彼に　僕は少しむくれた顔になった
「違いますよ・・・このまま帰したら母に怒られますから　お茶くらい飲んでって下さい」
「ははは（笑）じゃぁ　ちょっとお邪魔するよ」
彼はサンダルを脱いで　家にあがった
僕は彼のきれいな足首とくるぶしを見つめていた。

「コーヒー入れますね」
「悪いなぁ　病人に・・ていうか　お前昼飯食った？」
「いや・・まだです」
「そっか・・勝手に台所使ったらお母さんに悪いかな？」
「いえ　そんな事ないですけど・・・」
「俺　料理上手いんだぞ（笑）なんか作ってやろうか？」
彼はにこにこしながら　僕のいる台所へやってきた
ちょっと失礼　と呟きながら冷蔵庫を覗き　手際よく中からいくつかの食材を取り出す。
「食欲は？」
聞かれて　僕は「腹　かなり減ってます」と応えた
彼は笑いながら「じゃぁ　チャーハンな」と　早速料理にとりかかった
僕はフライパンや調味料などを探し出し　皿とスプーンやコップを用意した

見事な手際と包丁さばきで　彼はあっという間においしそうなチャーハンを作り上げていた。
卵がふっくらとご飯にからみ　細かくキレイに刻まれた具材はとても冷蔵庫から発掘された残り物とは思えないほど美味しそうである。

僕は麦茶をコップに注ぎ　彼と向き合って座った

彼は　軽く手をあわせて「いただきます」と言った
指の長い大きな手が　軽く合わさるだけで　なんともお行儀のよい品の良さを感じさせる。
この人の今時な「イケメン」な外見に対して　醸し出されるどこか古風な好青年の雰囲気は
なんとも不思議なミスマッチに思える
僕は一瞬　彼を見つめて（また）固まっている自分に気づく
チャーハンはもの凄く美味かった。

「座ってろよ」
そういって　彼は食卓の後片付けも実に手際よくやってのけた
感心する僕に「一人暮らしが長いから上手くなった」と言った

「佐藤コーチは彼女とかいないんですか？」
「えっ？　ああぁ～・・・今は　いないなぁ・・・」
「前はいたんだ」
「えっ？（笑）そうね　いた時もあったよ　昇はガールフレンドとかいるの？」
「僕は・・・いませんね」
「そっか（笑）　昇　モテるだろ？ジャニーズ系じゃん（笑）」
「からかわないで下さいよ・・・全然っ！そんな事ないですし・・」
「ははは（笑）そっか」

僕とコーチは彼が持ってきてくれたプリンを食べた。
今日彼は仕事が休みなのだそうだ。
僕は思いがけず　コーチとゆっくり話をするチャンスを得て嬉しかった。
「昔　何度か昇の家でご飯ごちそうになったなぁ～」

懐かしそうに彼がそう言った時　僕は少しびっくりして聞き返した
「そんな事　ありましたっけ？？？」
「あれ？覚えてない？まだ昇が俺に小猿みたいにしがみついてた頃お母さんが恐縮されて　貧乏学生だった俺に晩ご飯食べさせてくれたぜ」
「そ・・・そーなんだ・・・」
「覚えてないか（笑）１年生だったっけ昇？可愛かったなぁ～　細っこくて軽くって」
「・・・やめて下さいよ・・・」
「でも　よく頑張ったよな（笑）泳げるようになったもんな！」
「うん・・・コーチのおかげだね」
「いや　昇が自分で頑張ったんだよ（笑）」
彼の笑顔はどうしてこんなに優しくて　心に暖かく染みこむんだろう・・・・
僕はこの笑顔が大好きだ。

「起きてて大丈夫か？横にならなくて平気か？」
彼は心配そうに僕の顔を覗き込む
笑顔が素敵すぎて照れくさくなって俯いてました　なんて言えるハズもなく
僕は　とりあえず　素直に「じゃぁ・・寝ます」と応えた
「じゃ・・俺　帰るわ」
「えっ？帰るの？」
「ああ（笑）だって　お前寝るのに　俺いても仕方ないだろ
子守歌でも歌って欲しいか？　一人のお留守番は怖いでちゅか？昇クン（笑）」
「そ・・そーじゃないけど・・・」
これ以上引き留める理由も見つからず　僕は黙り込んだ
もの凄く残念そうな顔になっていたのだと思う

彼は先ほど玄関先で見せたのと同じ　「仕方がないな」というような優しい　お兄さんらしいほのかな笑顔で僕の頭を軽くこづいた。
「参考書　見せろよ　お前寝てていいから（笑）傾向のとこにチェックいれてやるよ」
そういって笑った
「うんっ！！」　現金なことに僕の声は先ほどとは打って変わって弾んでいた。

4．若気の至り

4．若気の至り

僕は彼の横顔を見上げるように見つめていた
彼は僕の机の前に座り　参考書を広げてマーカー片手に頁をめくっている
僕はベッドに横になってそれを眺めている
「こんなもんかな・・・とりあえず英語と数学チェック入れといたから・・・
後は・・ぼちぼち問題集とかやって　何かあったら聞けよな」
「・・・うん・・・ありがとう」
彼は参考書を閉じると椅子のキャスターで身体の向きを変えると
僕の額に手をのせて言った
「熱は下がってるの？」
彼の手はほんのり冷たくて気持ちよかった
僕は何も応えず彼の大きな手の下で目を閉じた

僕が可愛い女の子だったら・・・まぁ　礼儀正しい彼は女の子が一人でいる所に
上がり込んだりしないだろうけど・・・それでも　今　僕が女の子だったら・・・
彼はこうして目を閉じた僕に　キスくらいするのだろうか・・・
ふと自分の思った事に　自分で内心狼狽えた
あまりにも自分の考えた事が突拍子もなく思えて
僕は思わず勢いよくベッドの上に飛び起きてしまった

「どっ・・・どした？」
目の前に　僕よりももっとびっくりした顔の彼がいた

大きな目を見開いて　彼の瞳の下側のぷっくりとした涙袋というのか？
それが　タレ目と相まって　見開いたびっくりまなこをとっても可愛らしく見せていた
あんまり可愛い顔で　僕は思わず吹き出してしまった

「どっ・・・どした？・・・大丈夫か？？」
笑いが止まらない僕を　彼は心配そうに覗き込む
僕は思わず彼の首に腕をまわすとヘッドロックよろしく彼の小さな顔を脇に抱え込んだ
「ぐへっ！な・・なにすんだよぉ～っ！」
彼は僕に頭を抱え込まれたまま　椅子から腰を上げた
そのせいで僕たちはバランスを崩して　彼が僕の上に覆い被さるように倒れ込んできた
「ぶほっ！」　彼が僕の肩越しに枕に顔をつっぷしている
僕は胸の上に　いや　全身に彼の重さとその暖かさを受けとめていた
「昇っ！お・・潰した・・ごめんごめん　大丈夫か？お前がふざけるからだぞっ」
彼がそういいながら起き上がろうとするのを　僕は見上げていた
そして　彼の大きな黒い瞳と視線があった

「・・・？昇？どした？」
そう言って彼は僕の顔の両側に手をついたままじっと僕を見下ろしている
僕は一体どんな顔をしていたのだろう
僕は一体どんな目で彼を見つめていたのだろう
僕は一体どうしてしまったんだろう
僕はどうしてこんなに彼の事を見つめてしまうんだろう
そして　どうしてこんなに胸が苦しくなるんだろうか・・・・
彼の目に映った僕は　どんな姿だったのだろうか・・・

僕はただ　彼の目からその視線を外せずにいた

5．初恋はいつですか

5．初恋はいつですか

あの日　彼の目が妖怪メデューサで　石にでもされてしまったみたいに
僕が　彼を見つめたまま固まってしまったあの日
帰宅した母が鳴らした玄関チャイムがラウンド終了のゴングだった
見つめ合って　ただバカみたいに固まっていた僕らは
チャイムの音で一斉にベッドから飛び降りた
そして　顔を見合わせてなぜか大笑いしていた
母は部屋のドアをノックしながら「何？楽しそうね？」と顔をだした
佐藤コーチの姿を見ると　とても嬉しそうに笑っていた
母がとても可愛く見えた

僕とコーチは母に連れられて寿司屋へ行った
母は終始ご機嫌で「沢山食べてね」と太っ腹だった
他愛のない世間話と僕の受験の話をして
寿司をたらふく食べて　コーチは帰っていった

夜遅く帰宅した父がまたしても佐藤君との晩ご飯を逃したと悔しがった
この夫婦は　僕よりも出来のいい長男の話でもするように
佐藤コーチの話を嬉しそうにする
僕も　まんざらそんな両親がイヤじゃなかった
コーチが本当に兄貴だったら
・・・・あれ？・・・兄貴だったらいいのに・・・って・・・
僕も思ってなかったっけ？？
微妙に・・・ほんの少し　僕の心は「兄貴じゃなくてぇ・・・」と

秘かな反論を訴えていた

じゃぁ何なんだ・・・・・
１５歳の僕には　それが「恋」というものなんだということすら
判っていなかった
そう　思春期のごくごく初期の段階には　男の子も女の子も
同性相手に恋をしてしまうこと　よくあるっていうじゃないか・・・
別に珍しい事じゃないんだ・・・
それは　本当の恋愛をするための予行練習みたいなものだって
何かの本で読んだことがある
だから・・・きっと　これが「恋」でも・・・かまわないんだ

僕は　自分のココロと折り合いをつけようと必死だった
風邪が治るまで　という言い訳で
僕はしばらくプールへ行かなかった
本当は　佐藤コーチに会いたくなかった
いや　とても会いたかった　顔を見たかった　話をしたかった
でも　会いたくなかった
ややこしい・・・なんだかとっても自分の気持ちがややこしい
もどかしくて　苛立って　たまらなく切なくもなったりして

クラスに　もの凄い美少女の転校生とかやってこないかなぁ・・・
なんて　真剣に思ったりもした　　そして僕と恋に落ちてくれない
かしら・・・
なんとか　このもやもやとした　もてあまして仕方のない気持ちに
見切りをつけたかった
悩める受験生　こんな時に恋なんて・・・試練の時だった

6．覚醒そして自覚

6．覚醒　そして　自覚

僕の風邪はなかなか完治せず　しつこい咳に悩まされているうちに
季節はいつの間にか制服を冬服にかえた
僕は１１月の半ば頃までプールへ行けずにいた
その間　学校に僕が恋におちるような美少女の転校生もなく
ただ単調な受験生の日々が続いていた

咳がでるだけで身体は元気なのに　医者は泳ぐ事を許してくれなかった
身体がみるみるなまっていくようで　僕はかえって勉強も捗らなくなっていた
ようやく医者の許しが出て　ジムのプールへ顔を出したのは
もうコーチと寿司を食べに行ってから２ヶ月半近くもたってからだった

「のぼる君！久しぶりじゃない　具合よくなったの？受験勉強してる？」
受付の顔見知りの女性が笑顔で迎えてくれた
僕はロッカーのキーを受け取りながら「おかげさまで」と応えた
そうしながら　僕は無意識に佐藤コーチの姿を捜していた
フロントの近くにはその姿はなかった
僕は少なからずがっかりした気分になりながらロッカーへ向かった

水着に着替えてプールへ向かった
プールでは夕方の子供達のスイミングスクールが行われていた
フリーのコースに入りながら　子供達の方を見ると　担当のコーチ

が2人
一人は佐藤コーチ　そしてもう一人は見慣れない若い女性のコーチだった
僕は二人が子供達と楽しげにレッスンをしている様子をぼんやりと眺めた
彼が僕に気づく事はなかった
当たり前だ・・・大事な子供達を預かっているレッスン中なのだ・・・
彼は真剣に仕事に取り組んでいるのだから・・・僕になど気づくハズもない

僕はなんとなく身体が重いのは　随分と長いこと泳いでいなかったせいだと思った
それ程　僕のクロールのストロークは鈍く　キックも力がなかった
僕は１０００メートルを泳ぎ切るのがやっとだった
それも　いつもよりも随分とタイムが悪かった
間をあけると泳げなくなるもんだなぁ・・・などと思いながらプールから出た
丁度　スクールの子供達が二人のコーチに向かって終了の挨拶をしていた

ニコニコと笑顔で子供達を見送る彼を見た
隣りにいた女性のコーチが彼の背中を笑顔で軽く叩くのが見えた
僕の胸にずきんとした痛みが走った
一瞬　息が止まったような苦しさに驚いた
僕は　すごすごとシャワー室へむかった

「のぼるっ！来てたのか？風邪しっかり治したか？」
シャワーを浴びている僕の背後から彼の声が降ってきた
「あっ・・・はい・・なんとか・・・」

僕はシャンプーを流しながら振り向かずに応えた
「俺　今日もう終わりだから送ってってやるよ」
「えっ・・・マジ？」
「マジ（笑）　着替えたらフロントで待ってろよな」
「うん」
僕は急になんだかそわそわとした気分になった

だがその気分は長くは続かなかった
僕は彼の車の後部座席におさまっていた
助手席には　先ほど子供達のスクールで彼と一緒にレッスンをしていた
あの若い女性のコーチがいて　彼と楽しそうに話しをしている
僕がプールを休んでいる間に新しく入ったコーチなのだそうだ
「ちょうど昇の家までの通り道だから一緒に送っていく」
と彼は言っていた
彼の恋人なのだろうか・・・僕はその女性の化粧気のない
それでもとても可愛らしい顔を　斜め後ろから眺めていた

「ありがとうございました　また明日」
女性のコーチはそう言って　彼と僕に笑顔で手を振って
途中の駅前ロータリーで車を降りた
改札へ向かってゆくまでに彼女は一回だけ振り向いて彼に手を振った
彼は彼女が改札に消えるのを見届けてから車を発進させた
「さってと　次は昇んちまでなっ」
彼はにっこりと後部座席の僕に向かって　ミラーの中で微笑んだ
僕の胸がまたきゅっと痛んだ

（恋人なんですか？）　僕は彼にそう聞きたくて　でも聞けなかった
27歳のこんなに格好いいヒトに恋人がいたって何の不思議もない
だけど・・・聞けなかった　聞きたくなかった

そうだよ　と笑顔で応えられる事が怖かった
なんで怖いんだ？　僕がそれで何故ショックなんだ？　何故？
僕は情けないことに　この期に及んでようやく自分の気持ちに気がついた
そうか・・・僕は彼の事が好きなんだ・・・佐藤コーチの事が　好きなんだ
そう気がついた途端　運転席の彼の後ろ姿がせつなくなった
ジムのシャワールームに備え付けられた　シャンプーの香り
僕と同じ匂いなのに　僕には彼の髪がとても良い香りに思えた

7．人生について考える

7．人生について考える

家に母はいなかった
玄関に張り紙がしてあった「昇へ父と母は急用にて外出　詳細はメールします」
僕は慌てて携帯電話を鞄から取りだした
僕がプールで過ごしていた時間に何度か母の携帯から着信履歴があった
電話に出ない僕に業を煮やし　慌てて出て行ったのだろうか
メールには親戚の一人が病院へ運ばれたので見舞いに行く
帰りは明日になるので　一人で留守番するように　と書かれていた

「昇・・お母さんたち何だって？」
「あ・・・・親戚の見舞いに行くから留守番してろって・・・明日帰ってくるらしい・・・」
「そっか・・・」
彼は僕を送ってきて　玄関の張り紙を一緒に見つけ
事の成り行きが判ってから帰ると僕に付き添っていてくれた
僕は念のため母の携帯に電話をかけてみた
しかし母は出ず　留守録のメッセージが流れた
「・・あ・・僕です　メール見ました　留守番します　何かあったら連絡下さい」
そうメッセージを残すと僕は電話を切った

「病院だから　きっと電源切ってるんだろうな」
「うん」
「親戚って　よく知ってるヒト？」

「うん・・・僕の従姉妹　父の弟んとこの女の子」
「そっか・・・心配だな・・」
「うん・・僕とそんなに歳がかわらないんだ・・・」
「そっか・・」
「前から身体が弱かったんだ・・・」
「そっか・・」
「うん・・・」
僕は正直　とても心細かった
一人の留守番なんて怖くも何ともない　でも　歳の変わらない従姉妹が
もしかして生死の境を彷徨っているのだとしたら
僕はとても心細く　怖かった

「昇・・・一緒に居てやろうか？」
「えっ？」
「それとも　携帯だけあればお母さんたちと連絡とれるか？
だったら今晩　俺の家に泊まるか？」
「えっ？」
「一軒家に一人はさすがに怖いだろぉ　いくら男でも中三じゃなぁ・・」
「怖かぁないけど・・・正直ちょっと心細い・・かな」
「だよなぁ・・・車もここに追いとけないし　俺のとこ来いよ　飯も喰って行こう」
「いいの？」
「いいも悪いもこうして居合わせたのも何かの巡り合わせだろ？
年長者として見過ごすワケにはいかないしな（笑）」
彼はいつもの優しい穏やかな笑顔で言った
「ありがとう」
僕はありがたく彼のお言葉に従って　もう一度彼の車に乗り込んだ
今度はしっかり助手席におさまった

彼は途中　広い駐車場のある牛丼の店に僕を連れて行ってくれた
飯はしっかり喰っておかないと　元気もでないっ！とかいいながら
彼は僕に大盛りの牛丼に卵と味噌汁と漬け物までつけたフルコース
をご馳走してくれた
二人で掻き込む牛丼はとても美味しく感じた
なんだかなぁ・・・僕は彼の事が好きだとさっき自覚したばっかり
なのに
こうしてデートでもしてるみたいに　隣り合って座って牛丼なんか
掻き込んで・・・
しかも　この後彼のおうちにお泊まりだ・・ぞ・・・
僕はなんだか　どきどきを通り越して　すっかり自分の事じゃない
みたいに
どこかうすらぼんやりと霧に包まれたみたいな感覚だった

「散らかってるけど　入れ入れ　テキトーに場所作って座れよぉ」
駐車場に車を止めて　彼の部屋に入った
２ＤＫというのだろうか　狭いキッチンとバスルームとトイレ
そして一部屋　ベッドとテレビが置かれている　それだけの部屋だ
った
「さっき　昇の家まで行ったのになぁ　中に入って着替えくらい持
ってくればよかったな
全然気がつかなかったわ　ごめんな」
そう彼に言われるまで　僕の方こそ何にも気がついていなかった
白い霧がちょっと晴れてようやく僕はちょっとはマシな思考回路を
取り戻した
「あっ・・・・そうだよね・・・そうだ全然気がつかなかった・・・
ごめん」
「まぁいっか　俺の服貸すから我慢しろよ」
「すみません」

「風呂はいるか？」
「いえ　さっきプールでシャワー使ったから」
「そっか　じゃ麦茶でも飲むか・・・」
彼はグラスに入った麦茶を二つ持ってやってきた
僕は狭い部屋の中　居場所がなく　なんとなくベッドとテレビの間に立ち尽くしていた
「座れよ（笑）」
そう言って　彼はその辺に散らかっていた新聞だの読みかけの本だのを重ねて部屋の隅へ押しやった
ベッドにもたれるようにして座った彼の横に僕も腰をおろした
「携帯に連絡は入ってないか？」
彼に言われて僕は携帯を見る　しかしそこには着信もメールもなかった
「なにも・・・ないみたいです」
「そっか・・・ま　今夜は枕元に携帯電源入れて置いておくんだな」
「はい・・そうします」

彼の言った通りだった　僕の携帯は１１時を少し過ぎた頃に母からの電話を受信した
「昇？あんた今どこにいるの？家の電話に出なかったから・・・」
「あ・・連絡するの忘れてたごめん　佐藤コーチが一緒に居てくれて今コーチの家にお邪魔してる」
「そう　それはよかったわ　ご迷惑おかけして申し訳ないけど後で母さんもお礼に伺うわ
でね　麻ちゃん・・・麻子ちゃん　亡くなったの」
「・・・えっ・・・・・」
「随分前から悪かったみたい・・・残念よね・・・」
「・・・・・・・・・」
「昇？大丈夫？」

「・・うん」
「でね　明日の夕方お通夜で明後日がお葬式になるから
母さんたちも明日のお昼には一旦家に戻るわ　その後昇も一緒に行きましょう」
「・・・わかった」
「だから　今夜はコーチの所に泊めてもらって　明日昼前には家で待ってて頂戴」
「・・・わかった」
母は僕の携帯で佐藤コーチに礼を述べると電話を切った

従姉妹が死んだ　まだ13歳だった　おとなしい可愛い女の子だった
あまり一緒に遊んだりした記憶はない
小さい頃から身体の弱い　小さな女の子だった
その従姉妹が死んだ
僕はなんだか身体がふわふわとして　自分の身体じゃないみたいで
頭の中もすっかり空っぽになったみたいに真っ白だった
「昇・・・のぼるっ？」
「・・・えっ・・・」
僕は僕の顔をじっと覗き込んでいる彼の声で我に返った
「昇・・・大丈夫？」
彼の瞳は黒く大きく　そして心配そうに曇っていた

「・・・・悲しいんだけど・・・悲しいよ・・もちろん・・・でも
正直
そんなに親しかったワケでもないし　ここ数年会った事もなかったし
だから悲しいとか言うのとちょっと・・・違うんだ・・・なんだか
ただショックっていうか・・・13歳で死んじゃうって　なによって・・・」
「・・・・・そうだな」
彼は何も言わず　ただ　僕の隣りに肩を寄せて座っていてくれた

彼は僕にベッドを譲り　床に布団を敷いて横になった
電気を消して暗くなった部屋の中　カーテン越しにうっすらと見える暗い空
僕はぼんやりと従兄弟の女の子の事を考えていた
彼女は楽しい１３年間だったかしら？
彼女は何が好きだったのかしら？
彼女はやりたいことを沢山できたかしら？
そして彼女は１３年間に　恋をしただろうか？
僕は自分が１５年間　彼女より２年多く生きてる僕は
彼女の１３年間よりホントに２年分沢山の事をしてきたのだろうか？
僕は・・・・ぼんやりとそんなことを考えながら　眠りについた

8．帰り道

8．帰り道

僕は佐藤コーチに送ってもらって翌日の昼前に家に戻った
彼は「気をつけてな」と言って帰って行った
彼の乗る大きな車の後ろ姿を見送って　僕は家に入った
家の中はたった一晩　誰もいなかっただけなのに
随分と長いこと誰もいなかったみたいに　しんとして空気もこもって重かった
僕は少し寒いのを我慢して　家中の窓を開けて空気を入れ換えた

そうこうするうちに両親が帰宅した
僕たちは慌ただしく身支度を整えると父の車で従姉妹の家へ向かった
通夜に参列し　そのまま従姉妹の家に泊まり翌日の葬式に出て
その日の夕方　僕たちは家に戻った
僕の祖父母は４人とも元気に存命だ　だから僕は生まれて初めて葬式というものに参列した

通夜と葬式には沢山の人たちが訪れた
その大半は彼女の小学校や中学校での友人たちとその家族だった
目を真っ赤に泣きはらした１３歳の同級生たち
従姉妹と言うだけの僕なんかより　ずっとずっと彼女の事をよく知っている人たち
彼らの涙は見ている僕の目にも涙を溢れさせた
僕は彼女の死を知ってから　初めて泣いた
彼女の友達が泣くのを見て泣いた

僕が死んだら　みんなああやって泣くのだろうか

そしてふと思った　もし彼が明日死んでしまったら　僕はどうするのだろう
きっと涙もでない程にその場で石になってしまう
生きて　今彼の事を思うのって　ホントはとてもすごい事なんじゃないか
だからこそ　今　伝えておかなきゃいけない事ってあるんじゃないか・・・
僕は帰り道　そんなことを考えていた

僕は父の車が家の前につくと　家に入らずそのままプールへ向かった
母も　ちゃんとお礼を行ってくるようにと送り出してくれた
従姉妹の家の近所の有名な和菓子屋のお土産を持たせてくれた
僕は初めて水着を持たずにジムへ向かった

9．好きです　の意味

9．好きです　の意味

その日　コーチはジムにいなかった　珍しく休みだとフロントの女性が教えてくれた
僕はジムの玄関先から彼の家へ電話をかけた
「あ・・もしもし　昇です　先日はありがとうございました　今日休みなんですか？」
電話の向こうで彼は少しくぐもった咳をしていた
風邪をひいたらしく　家で寝ているという
僕は何か必要な物があれば届けますと切り出し
幾分無理矢理のように彼の家へ押しかける約束を取り付けた

風邪がまたうつるといけないからと電話口でいう彼に
僕はどうしても今日届けたいモノもあるからと食い下がり
電車とバスを乗り継いで彼のマンションまでやってきた

途中　プリンを買った
母に持たされた和菓子とプリン　とても病人への土産には相応しくなさそうだったが
甘いモノが好きな彼の事だから　まぁいいかと勝手に思う事にした
それでもちょっと気になって　コンビニでレトルトのお粥のパックを買った

マンションの玄関でインターホンを押す
オートロックが解除され　僕は彼の部屋の前までエレベーターであがった
彼は部屋着のスウェット姿で僕を迎えた

いつもより　ほんの少し顔色が良くない
それでも優しい穏やかな笑顔はいつものままだった
「お邪魔します」
僕は部屋へあがった

「横になってて下さい　何か食べられそうですか？」
僕の問いかけに彼は笑って応えた
「昇に看病してもらうんじゃ　たまらんな」
「どういう意味ですか」
「いやいや　こないだエラソウに見舞いに行ったのにな　今度は俺がダウンした」
「僕がうつしたのかもしれない・・・ごめん」
「いや　プールで毎日いたら時々風邪も引くさ」
「うん・・・」

僕は黙って部屋の中を見回した
その様子を見て彼が笑いながら言う
「なんだ？何を観察してる？」
「・・・・女の人が・・・来た気配を探ってるんだ」
「女？」
彼の目が可笑しそうに細められ　くっくっくとむせるように笑った
「看病に来てくれるような恋人とか・・・・いないの？」
「こないだも聞かれたよな　昇に・・今はいないって言わなかったか？」
「・・そうだけど・・でも　コーチならいつでもそういう人・・いそうじゃん・・」
「何を根拠にっ！（笑）残念ながら　俺は一人寂しく寝てましたよ」
「・・・・ふぅ～ん・・・・」
僕は買ってきたレトルトのお粥を器にあけて　電子レンジで温めた

コーチはそれをベッドに座ったまま　ゆっくり食べた
「美味かった　ありがと」
「熱はないんですか？　薬とか飲んでるの？　病院は？行った？」
「なんか　昇が世話焼きの彼女みたいだな（笑）　売薬だけど一応飲んだよ」
コーチは可笑しそうに笑って言った

ホントに　僕が女の子だったらよかったのに・・・複雑な気分だ・・
別に本当に女の子になりたいとか　今の自分がイヤだとかいうんじゃなくて
オトコの自分がオトコのコーチを好きなのは　やっぱり変な気がするし
だったら女の子だったらいいのかなぁと・・・そんな単純なだけの発想で・・・
自分でもよく判らなくなってきた・・・

好きです　って伝えるのは　ホントは何のためなんだろう・・・
自分の中に抱えきれなくなって苦しくて相手に向けてその想いをぶつけてしまうのだろうか
伝えた後に　どうなるかなんて　考えなくていいのかな・・・
でも　相手はぶつけられた想いをどうやって受けとめるのかな・・・
受けとめられないとはっきり拒否されたら　どんな気持ちになるんだろう
好きですって　伝えるのは　何のため？　それで傷つくかもしれなくても
もうこれ以上　自分の中に持ちこたえられない程に大きくなってしまった想いを
どうにかしたくてぶつけるの？
たった15年じゃ　わからない

たった13年じゃ　もっとわからなかっただろうね
貴方が死んでしまいたいと思う今日は　昨日　もっと生きたいと願った誰かの明日
そんな言葉が頭に浮かんだ
苦しくっても　苦しいって思えるのは生きてるからだよね・・・
生きてるから　辛くても　苦しくても　生きてるって　すごいよね・・・

「コーチ・・・死なないでね・・・」
「の・・のぼる？」
「風邪だって・・バカにできないから・・ちゃんとお医者さんに行って・・治してよ」
「どした？昇・・」
「・・・死んじゃ　やだよ・・・」

僕は泣いていた　涙が次から次へと溢れてきてどうしようもなかった
袖口でぬぐってみても　間に合わないほどに涙が流れた
コーチは黙って僕の肩を引き寄せて　自分の隣りに座らせた
僕の肩を抱いて　頭を軽く撫でてくれた
僕はどうしようもなく　ただ　泣きながら座っていた

１０．キスして下さい

１０．キスして下さい

しばらく泣いて　僕の涙もおさまってきて　それでもまだしゃくりあげる僕を
彼はずっとその腕の中に抱えていてくれた
小さい子供をあやすように　泣きやまない小学生を腕に抱えてレッスンをするように
彼は今も変わらず　僕をこうやって抱き締めてくれる

懐かしい　コーチの腕の感触　ずっと覚えてる　忘れない小学生のあの日
僕はコーチの腕に抱かれてプールにいた
他の子供達が水の中にすいすい入ってゆくのを　泣きながら
そしてコーチの腕の中から眺めていた

安心できて　暖かくて　とても居心地のいい場所だった
父に抱っこされるのとも違う　何だか不思議な感じだった
そしていつも　僕の顔の横には優しい笑顔のコーチの顔があった
キレイで格好良くて　大好きなコーチの顔がそこにあった

今も　心配そうに僕の顔を覗き込む彼の顔が間近にある
「従姉妹さん・・・残念だったな・・昇もよく頑張って行ってきたな辛かったな・・」
僕が泣いた理由も　突然死なないでなどと言い出した事も
ちゃんと彼は判ってくれていたのだろう
突然の従姉妹の死に　僕が戸惑っていたことも　死というものを初めて間近に感じ

大きなショックを受けていることも　僕以上に彼は判ってくれていたのかもしれない

彼の大きな黒い瞳に見つめられて　僕の頭は思考回路が鈍り・・・
口は思いがけない事を口走った
「・・・キスしてください・・・」

彼の瞳に　素直に驚きの色が浮かぶのが見えた
その一瞬で　僕の中は後悔で一杯になり　逃げ出したい　消えてしまいたい
そんな思いで身体が震えるようだった

しかし　そんな僕の顎に彼の長い綺麗な指が静かにかかり
そっと上を向かされた僕の唇に　彼の柔らかいふっくらとした
あの紅い唇が重なった
全身に電気が走るようなもの凄い衝撃を感じた

ただ　そっと　その唇が　僕の唇に重なっただけなのに・・・

11．どうしよう

11．どうしよう・・・

「のぼる？」
「ん・・・」
僕は顔をあげることができなかった
ほのかに残る彼の唇の感触がまだ僕の唇を震わせる
声なんて出ない
彼の顔なんて見られない

その口づけは思いがけず
そして意外な程に自然に重なり合った唇を
お互いが強く求めているのを感じた

口づけは深くなり
強く吸われて息がつまり　思わず開いた隙間から
強い意志を感じる舌が差し入れられてきた
それは僕の舌を追い回し　絡み　吸い上げた

こぼれた唾液を追うように唇が顎を這い
角度を変えて唇を再び塞がれた
噛み付くように口づけられて
僕の意識に白い霧がかかる

頬に添えられた彼の掌の温かさを感じ
僕の頬はみるみる紅く染まっていくのが判る
強烈な欲求に負けて　細く目を開け彼を見た

そこに　うっすらとその瞳を細め
僕の反応を確かめるように見つめる彼の視線があった
僕らは時折　お互いの顔を盗み見るように瞳を開き
それでも唇が離れる事はなかった

長い
長い口づけがどれだけ続いたのだろうか
僕には判らない
その唇から解放された時
僕の身体にはほとんど力が残っていなかった
何もかもが身体の芯から溶け出して
僕はそこにいる事すら信じられず

彼の顔を見る事ができない
優しく名を呼ばれても
視線をあげる事すらできない

「キスして下さい」　そう言ったのは僕だ
そして彼は僕にキスをした
深くて甘い　大人のキスだった

それは僕が少女と体験したキスとは違う
身体の芯を熱くする
もっともっとと求めてしまう

そんな　熱くて苦しい口づけだった
僕は何かを期待していた
期待してしまう何か
彼はそれに気づいただろうか

それとも　彼はもうとっくの昔にお見通しだったのだろうか
僕は　溶け出した自分のかけらが僕の頑なな殻だったと思う
僕は今　殻を失った無防備なひな鳥だ
目の前の大きな存在にその庇護を求め
そのぬくもりを求めてしまう

僕は　彼を求めてやまない自分の心に戸惑っていた
彼の顔を見ることが　できなかった

１２．クールダウン

１２．クールダウン

あの日
コーチの口づけで全ての殻を溶かされたあの日
僕は自分の心に気がついた
彼を求めてやまない気持ちに気がついた
それは性急な欲求
抱き締めたい　キスしたい　そして全てを奪いたい
そんな気持ちに気がついた

そして僕はそれが恐かった
自分の気持ちが恐かった
恐くて恐くて　不安で不安でたまらなかった

だから
長く　甘い口づけから解放された時
彼の優しい声が僕の名前を呼んだ時
僕は彼の胸を押しのけて
顔もあげずに逃げ出した

鞄を掴んで逃げ出した
僕は　そのままプールからも逃げだした
高校受験を終えるまで　彼には会わない
そう決めた

自分の気持ちをもう一度
しっかり自分で見なおしたかった

一時の迷いで彼を悩ませてはいけない

彼の顔に浮かんだ　あの一瞬の素直な驚きの表情が
僕の心に突き刺さっていた
口づけされた喜びよりも
殻から出られた解放感よりも
僕は彼の戸惑いと優しさが辛く大きく心に刺さった

このままじゃいけない
自分の気持ちを整理して
クールダウン　そうクールダウン
このままでは自分も彼も火傷をする
それどころか
二度とは戻れない　業火に焼かれるかもしれない

すっかり怖じ気づいた僕は
勉強に没頭する事で彼を忘れようとしていた
それを一番喜んだのは幼馴染みの金子だった
奴は連日僕を図書館に誘い
連れだって受験勉強に励んだ

運動をやめて身体はなまり　気持ちは重く
模試の成績が上がってゆくのに逆らうように
僕の身体はその敏捷さを失い　鈍く重くなっていった
それは身体そのものというよりも
僕の気持ちそのものだったのかもしれない

受験本番のその時期を迎える頃
僕の精神状態も底辺めい一杯まで落ち込んでいた
しかし　皮肉にも成績は順調に伸びており

志望校への合格はほぼ間違いないだろうと模試の結果が出ていた

今となっては　彼の後輩になるその学校にまで
どことなく　気持ちが後ずさる心持ちになる
それほどに
忘れようとすればするほどに
僕の中に彼の存在は大きくあった

そして　それは消える事なく
日々　小さくなりもせず
それどころか
日がたつにつれ　その存在は大きく膨れ
僕の心を圧迫した

早く大人になりたかった
早く彼に追いつきたかった
そして
肩を並べて　話がしたかった
その時こそ　本当の気持ちに気づけそうな気がした
彼もまた
それを　僕が大人になる事を　待っていてくれると信じて

高校受験を迎えた
全力を尽くそうと　友人たちと握手を交わした
冬の空気が冷たかった

クールダウン　そう風が耳元に囁いた

１３．大人になったら

１３．大人になったら

「最近　プール行ってないの？」
「え？ああ・・・受験で休んでから行ってないなぁ・・・」
「また同じクラスになれてうれしいよぉ」
「ははは　翼は小学校からかわらねぇなぁ　ガキのまんまだね」
「自分だって同じ歳のクセに何大人ぶってんだよ」
「翼より大人だと思うよ」
「かわらねぇよ」

「じゃぁ　キスした事ある？翼」
「えっ・・・キス？なんでそんなの関係あるの」
「ま・・・いっか」

僕にもよく判らなかった
無事に志望校に合格し　小学校から一緒の金子翼もまた
同じ高校へと通い始めていた

彼が　金子翼が僕を追って　志望校を決めていたなどと
そんな事を知ったのはまだ随分と後の事だった
この時はまだ　僕は何も知らず
ただ　ただ自分の事だけで精一杯だった

そして　受験という逃げ道が
合格という幸せな結果ではあったが
その逃げ道がなくなってしまった時

僕は再び　あの　彼への想いに苦しみ始めていた
忘れたと思っていた思い
クールダウンと自分に言い聞かせてきたこの数ヶ月
過ぎてみれば
それは　ただ彼の事を考えないで過ごした
ただそれだけの時間だった

無理矢理に　勉強をする事で彼の事を考える余地がない程に
自分を追い込んでやってきた
それが今　またぽっかりと　時間ができてしまった
規則正しくも　ゆったりとした毎日が過ぎて行く

その中で　僕の心の中の彼はまたその占める割合を大きくしていく

「泳ぎたいなぁ・・・」
「・・・のぼる・・・」
「水泳部に入る事にしたよ」
「・・俺も・・俺も入る」
「そっか・・」
「うん」

僕は高校の水泳部に入部した
日々の学生生活をめい一杯に忙しく予定を入れ
部活と勉強に明け暮れた
彼のいるプールへは　足を運ばなかった
合格の報告さえしていなかった

まだ　僕は
彼に会えなかった
あの　口づけの衝撃から　立ち直れていなかった

そして何より　あの時の彼のコトバ

耳に今も残る　あの低く響く美声が僕の耳に囁いた
あのコトバ　それはあの日　僕が逃げ出したあの日
彼は口づけの後　僕の耳に囁いた

「これが精一杯だ・・・俺も・・そしてお前が大人になったら・・・」

最後の方は　押しのけた胸に小さく消えた
僕の耳には聞こえなかった
僕は振り向く事もできずに逃げ出したのだから

大人になったら
オトナニナッタラ

僕は大人になるまで彼に会わない
そう　それが僕の頑なな思いだった

１４．幼馴染みの恋心

１４．幼馴染みの恋心

それは高校３年の夏　部活の終わった時だった
大学受験をする連中はとっくの昔に引退し
夏の部活になんか顔をだしてはいなかった

僕はＫ大への内部進学の推薦枠をとっていたので
日々の勉強を真面目に続けていれば
卒業と大学入学が保証されていた

だから
僕はいつまでも　プールにつかって過ごしていた
金子もまた　進学する学部は違ったが推薦を取っており
僕同様に　部活を引退する事なく活動に参加していた

そして　その日僕は思いがけない告白を受けた
誰あろう　相手は小学校以来の幼馴染み
親友でもあろうと信じて疑わなかった
そう　金子翼だった

部活を終え　後輩達は遠慮して使わない
個室のシャワー室に僕と翼はいた
それぞれに泳ぎ疲れた身体に熱い湯をかぶり
カルキ臭いプールの水を流していた

僕は頭からふりかかる水の中
背後に気配を感じて顔だけをそちらへ向けた

その僕の動きを制するように声がした
「ふりむかないでっ・・」
「・・・・？」

「のぼる・・・そのままで聞いて」
シャワーの音にかすれる声が小さく途切れる
僕はシャワーの栓をひねり　水を止めた
背中をむけたままその小さな声に応える
「つばさ？何？どうした・・・」

その瞬間
僕は背中に寄り添う肌の感触に身を固くした
脇から差し込まれた両腕が　深く僕の胸元にまわされてきた
背後から抱き締められた格好で
僕はもう一度　つぶやいた
「つばさ・・・どうしたのかちゃんと答えてくれ」

「のぼる・・・昇が　昇の事が好きなんだ」
「・・・・つばさ・・・・・」
「こうして・・・こうして昇を抱き締めたくて
この肌に触れたくて　ずっと・・ずっと昇を見ていた」
「・・・・・・・・・・・・・」
「昇」

振り向くと　そこには思い詰めた翼の顔があった
茶色いクリクリとした瞳がじっと僕を見つめていた
小学生の頃からかわらない
いつも僕の後を追っかけてきた茶色い瞳
その瞳が僕を見つめる

僕は　何を思ったのだろう
（キスして下さい）　それは自分の声
彼につぶやいた必死の思い
ああ・・・あの時の僕だ・・・これは　あの時の・・・

僕は思わず　翼のその唇を奪った
振り向いて　お互いが何も身につけていないその姿のまま
僕は翼の身体を抱き寄せて
その唇を塞いだ
小さく身震いする翼の身体が冷たかった

重ねた唇と　さぐり合う舌の動きに
下腹部にズキンと高鳴るモノが頭をもたげる
翼の胸のささやかな突起を指でさぐった
腕の中で翼の身体が小さく震え　その背がしなる

時折自分で触れて与える刺激を　相手のそれに置き換える
お互いの昂ぶりに手を添えて
深い口づけのままにさぐりあった
重なる肌から熱くなる
たまらない快感が脳髄を突き抜ける

かすかな罪悪感
わずかな戸惑い
ほのかな恥じらい
そして　片や熱い恋心をぶつけ
片や己の姿をそれに重ね
切なくやりきれぬ思いで肌を重ねる

「んんっ・・・の・・・のぼる・・もぉ・もっ・・・」

「ん・・俺も・・・」

お互いの絶頂をその手に受け止めていた

15．アルバイト

15．アルバイト

僕は逃げてばかりだった
コーチに会う事もできず　プールからも逃げだした
自分でも思いもしない事になった翼とも
顔をあわせづらくなり　避けるように逃げ出した

高校3年の最後は散々な日々だった
夏の日　僕は翼にキスをした
それは決して恋心などではなかった
自分でもよく判っていたのに

自分を慕って必死の告白をしたであろう親友に
僕は口づけを返した　そしてその身体に触れた
その一瞬に　僕は「彼」を思い浮かべていた
だから

翼にも判っていたハズ
僕の心に「彼」がいる事　それは15の頃から変わらない
幾人かの少女たちとも交際をした
しかし彼女たちに対して　僕の心がときめく事はなく
ましてや　つないだ手すら冷たく感じた

キスをねだられて応えても
それは僕にとって　何の思いもないものだった
翼に対する気持ちもまた
もしかして　男には違うのかと

己の嗜好を疑って　試してみたともいえるもの・・・

そして　それは「彼」を思い出させるだけの
それだけのものだった

僕は「彼」しか愛せない
僕は「彼」しか求めていない
そう　確信してしまった　もう戻れない
自分のココロと向き合ってしまった

逃げてばかりじゃ　終われない
決着を
つけなくちゃ・・・・・

僕は再び　「彼」のそばに戻る事を決心した
アルバイト募集　その広告を胸に
じつに3年ぶりにあのプールを訪れた
フロントには見覚えのない女性たちが並んでいた

「あの・・・スイミングコーチの募集に応募したいんですけど・・・」
そう切り出すと　スタッフルームから見覚えのある
年配のコーチが姿を現した

「うわぁ～っ！昇クンっ！！大きくなったわねぇぇ～っ！！
高校行ってからすっかりご無沙汰だったじゃないっ！！
元気にしてたの？？」
彼女はまるで息子の事のように僕を笑顔で迎えてくれた
小学生から知る少年が自分と同じ職場へ入ろうというのだ
それはそれなりの感慨もあるだろう

僕は簡単な面接の末　スイミングクラスのアシスタントに採用された
聞けば　佐藤コーチは今もかわらず　ここのプールで
コーチとして働いているそうだった
この日はたまたま休日でジムにその姿はなかった

僕は内心　その姿がない事にほっとしながらも
まだ辞めずにそこにいてくれた事をなにより嬉しくも思っていた
明日　彼に会う
僕は彼と肩を並べて同じ職場にたつ

僕は１９になった
彼は今３０歳になっているはずだ
大人になったよ　そう言ってみよう
僕はアルバイトを獲得した

１６．再会

１６．再会

「昇？」
「こんにちはっ！ご無沙汰しておりますっ！」
「おお～っ！昇ぅ～　お前ご無沙汰し過ぎだぞぉ～
一度お母さんに駅でばったりお会いして　お前がＫ大付属に
合格したって聞いたけど　お前報告にも来なかったし
ったく　愛想がないのもたいがいにしろよぉ～っ！！
そんで　今度はバイトかよぉ　驚かせるなよっ　」

彼は饒舌に笑いながらまくしたてると　僕の頭を何度も叩いた
変わらない笑顔と声だった
でも　どこかちょっとだけ照れくさそうに
そして何か慌てたような
そんなぎこちなさが僕の目には新鮮だった
明らかに　それは彼が「あの日の事」を覚えている
そう　僕に確信させるものだったから

彼も忘れていない　僕とのあの口づけを
そう確信した
それは　不思議と僕の心を落ち着かせ　穏やかにした
それまでの　あの葛藤とも言える焦燥感が
嘘のように心の中で消えていった

後には　ただ　これから毎日　このヒトと顔を合わせられる
その喜びだけが満ちていた
単純に　ただ単純に　僕は戻ってみてよかったとそう思った

彼のそばに　戻ってみてよかった
後の事は　これから考えればいい
今はただ　彼の近くに肩を並べて共にいられる事が誇らしかった

僕は子供達のスクールのクラスで彼のアシスタントについた
毎日通ってくる子供たちと　僕もすぐに仲良くなった
佐藤コーチは昔と変わらず　相変わらず子供にもその父兄にも
とても人気のコーチだった
クラスでは　どの子供も　コーチの言う事を真剣に聞き
皆がそろって上達していった

ある日　初めて参加するという　小柄な少年がやってきた
大きな瞳に一杯に涙をためて
彼は水がコワイと言っていた
初めての子供の世話はアシスタントが見る事になっている
クラスの時間中　その少年のそばに僕はただついていた

少年は　結局　水に顔をつける事ができないままに
その日のクラスを終了した
少し暗い顔をして　少年はプールを後にしていった

次の週から彼は週に2回　プールに通ってくるようになった
僕は気長にその少年のクラスにつきあった
少年は　必死に他の少年たちに追いつこうと
水に顔をつける練習を繰り返していた
僕は少年と水中にらめっこをしながら
ただひたすら彼が自ら水に入ることだけを待ち続けた
決して甘い言葉をかけてやる事はなかった
ましてや　少年を腕に抱えてレッスンするなど
僕はしたりはしなかった

「のぼる　昇のレッスン　クールだって評判なんだけど・・・」
彼がクラスの後　シャワー室で僕に声を掛けてきた
「クール・・・ですか？」
「そう・・冷たいっていうんじゃないんだけど　厳しいっつうか
なかなかにスパルタだねぇ～って　他のコーチの評判よ」
「評判・・・」

シャワーの音にかき消されながらも会話は続いた

「そ・・・あの泣きそうな少年にも　結構いろいろさせてるでしょ」
「はい　やらせてます　レッスンですから」
「俺は昇が泣いてた時は　待ちの心境だったけどなぁ・・・」
「僕も待ってますよ　あの子が自分でプール好きになるの」
「そっか・・・」

僕はシャワーの栓を止めると　隣りのブースにいる彼に大声で言った

「そーですよ　僕は誰かさんみたいに優しく抱っこなんて
しませんけどね」
「お・・・挑戦的なセリフ」
「そーですよ・・・僕みたいなのがまた育っちゃったら可哀想です
からね」
「なんだ？そりゃ」

彼もまたシャワーをとめて　タオルで髪をふきながらブースから出
てきた
ロッカールームへ歩きながら会話は続いた

「貴方が優しく抱っこなんてしてくれてたお陰で僕はこうなった」

「こうなったって何だよそれ・・・」
「まぁ　泳げるようになったのは感謝してますけどね
まともな恋愛もできない風にもなっちゃったんで　ちょっとそれがね
恨みがましく思えるっつぅか　あの子が大きくなった時に
昇コーチぃ～　なんて言われても困るんで」
「・・・・・のぼる・・・」

「はははは　佐藤コーチ　情けない顔しないで下さいよ
冗談ですよ　冗談！　やだなぁ　真に受けないで下さいよ
ホントなら　こんな風にバイトに来たりしませんって」
「・・お前　おどかすなよ・・・身が縮むぞ」
「ホント　縮みました？背の高さ　変わらなくなりましたよ」
「てめぇがデカくなったんだろうがっ！」
「はははは　そーですね　お陰様で大学進学も決まったし
ちゃんと　大人に　なってますよ　俺」
「・・・・昇・・・」

僕は
僕は一体何を言いたかったのだろう
彼を困らせて　ただ困惑させて　何を本当は伝えたかったのか
ちゃかして自分の心情を打ち明けた
あの口づけの続きを期待した
大人になったら　そう言った彼の心が知りたかった

でも
彼は「おどかすな」と　そう言った
そうなのだろう　もう３０にもなったいい大人が

彼からすれば　僕はいつまでたっても　あの泣き虫だった小学生
あの頃とかわらぬ　年下の後輩

いつまでも埋まらないこの年齢差が口惜しい
身体の大きさは変わらなくなり
仕事も同じにできる程になったというのに
いつまでたっても　僕は小学生の昇のままなのか

彼との再会は　新たな日々の始まりだった

１６．再会（後書き）

ラストスパートです
最終回に向けてρ（＾＾　）／　イッテミヨー！

１７．もう一度　告白の時

１７．もう一度　告白の時

淡々と　変わらぬ日々が過ぎていった
高校を卒業し　大学に入学し　僕は２０歳になった
学部が違った金子翼とは　キャンパスで顔を合わせる事もなく
あの高三の夏の出来事は　僕の中でも消えかかっていた

成人式に出席した時
僕の隣の席に翼が腰を下ろした
「久しぶり」
そう声を掛けられて　その笑顔に一瞬戸惑った
しかし　彼のその向こう側には　可愛らしい振り袖の女性がいた
「彼女なんだ」
そう言って　僕に翼はその女性を紹介してくれた
「美人だね」
「でしょ？昇見慣れてると面食いになってたみたいよ」
「やなジョークだね」
「かっかっか」

僕たちは　笑い会って親友をやり直せると肩を叩き合った
僕もいつか翼に彼女を紹介する日がくるのだろうか
ぼんやりと二人の姿を見送った

プールでのアルバイトは続けていた
成人式の会場からまっすぐにバイトに向かった
あの水が恐かった少年も　今ではもうゴーグルをつけて
他の少年たちと一緒にビート板で２５メートルを泳いでいる

僕は随分と少年の母親から感謝の言葉を頂いた

ああ　自分の姿だなぁ　と思う
懸命に　ただ懸命に水をきり波しぶきをあげて泳ぐ姿
あの頃　僕は何も考えていなかった
ただただプールで泳ぐ事が楽しかった
速く　速く泳げるように　記録が伸びてゆくのが嬉しかった
コーチに褒められて　バッヂをもらうのが嬉しかった

僕も今　彼らにそんな喜びを与えてあげられているのだろうか
バイトとはいえ　この仕事に関われている事が嬉しかった
そして　やはり何より　隣りに佐藤コーチの姿がある
その事が嬉しくてならなかった

「今日　成人式だったんですよ　俺」
「おお　昇が成人！２０歳！感慨深いねぇ・・・おめでとうっ！」
「なんかお祝いしてくださいよ　コーチ」
「お前　催促するねぇ～（笑）　よし　何か食いにいくか」
「やったぁ～っ！牛丼！大盛り！」
「安上がりな奴だなぁ～　まかせとけ　終わったら連れてってやる」
「うおいっすっ！♪」

こうして　僕はその日の晩ご飯を確約した
コーチはあの車高の高い車に僕を乗せて　仕事の後
牛丼屋へと連れて行ってくれた
フルコースご馳走になり　コーヒーを飲ませてくれと頼み込み
最近新しく買ったというコーヒーメーカーを見せてもらいに
彼の家へあがりこむ事にも成功した

そのコーヒーメーカーの入れたコーヒーは大層美味かった

「うっめぇ～っ　いいっすねぇ　このコーヒー」
「だろぉ～？ちょっと豆にも凝ってるから美味いんだぞ」
彼が誇らしげに笑った
えくぼが眩しくて　僕はそっとその顔から視線を外した

「昇がハタチねぇ・・・俺も歳とるワケだね」
自嘲気味にタバコをふかしながらそう呟くコーチは
落ち着いた　男の魅力に満ちていた
それでも　どこか可愛らしくて　僕にはかわらぬ恋しいヒト・・・

「ええ　もう　大人になりました　貴方の言っていた　大人」
「え？」

「今日まで・・・今日まで我慢しました　もうおしまいにします
僕も大人の仲間入りをしましたから　貴方と同じ土俵に立てた
そうでしょう？　もう　言葉にして伝えてもいいハズだ」
「・・・・のぼる？」
「僕は　あの日　貴方のキスから逃げ出した
でも　あの日　僕は決心したんです　大人になって　大人になって
貴方の元にもう一度戻ろうって　そして　その時はきっと
僕があなたに口づけをする　キスをするのは僕の方・・・」
「の・・・んん・・・」

僕は彼を押し倒していた
その驚いたように見開かれた黒い大きな瞳
そう　今日まで夢に見続けたその唇
僕は彼の唇を貪るように吸い続けた

「んんっ・・・ちょ・・のぼ・・る・・」
僕を押しのけようとする彼の腕を掴みその抵抗を抑え込む

「貴方が好きです」
僕は彼の耳朶を軽く噛みながら囁いた
もう後に戻るつもりはない
彼を抱く
僕の中の悪魔がそう囁く　抱いてしまえ　抱いてしまえ

彼のシャツをめくりあげ　その胸元のささやかな桜色の突起に口づける
彼の口から小さなため息がもれる
舌で転がすように　押しつぶすように　その甘やかな突起を弄ぶ
僕の中に熱いものが湧き上がり　それは足のつけ根に集まって行く
手を伸ばすと　彼のモノもまた熱くその首をもたげ始めていた

「抱かせて・・・宏さん」　初めて名を呼んだ
「昇・・・ど・・・どうしてこんな・・」
「ずっと・・ずっと好きだったんだ　知ってたでしょ」
「もう・・・もう　そうじゃないんだと・・思ってた」
「僕が貴方を忘れるワケないじゃないですか・・・」
「でも・・あっ・・」

僕の手が彼の昂ぶりをつかみ　掌に包み込む
それはやわやわと重量を増して行く
シャツを剥ぎ取り　下着ごとそのズボンも引き下げた
僕はかれの昂ぶりに口づける
そして愛おしくそれを口に含む
彼ののど元から大きな息がこぼれる

その鍛えられた見事な肢体は白くなめらかな肌がはりつめ
僕の欲望をかき立てる
白いうなじ　首筋　そして艶めかしく珊瑚色の小さな突起が

胸元に震えるように固くとがる
固くその入り口を閉ざしている蕾に舌を這わせ
ゆるゆると解すように愛撫する
指を差し入れ　逃れようとする細い腰を抱き戻し
ゆっくりとその蕾を開かせて行く

「の・・・昇・・・だ・・だめ・・」
「どこが・・・どこがいいですか？言って・・ここは？」
「はっ・・んん・・い・・いい」
「可愛いです　綺麗で可愛くて　大好きです」
「や・・・やぁだ・・・」
消え入りそうな声で顔を赤らめる彼がたまらなく妖艶で
僕の昂ぶりは一層腹を打つ程にもちあがる

「挿れます・・・」
「は・・・んんっ・・・っっつっ・・・」
「宏さん・・・つらいですか？辛かったら・・・言って」
「・・ううん・・いいよ・・昇・・いい」
「俺も・・・すっげぇ　いいです」
「ん・・・・」
ほんのり笑顔の彼の顔はたまらなく色っぽく
僕の頭は真っ白になった

これ以上ない程に　深く抱き合って　抱き締め合って
僕らはともに絶頂を迎え
白い目眩にもにた快感の波にのまれた

何度も何度もキスをした
身体を繋いだままにキスをした
離れたくなかった

離したくなかった
想いをとげた僕の心は　この上ないシアワセに満ちていた

「コーチ・・宏さん・・・ごめんよ　俺・・・」
「どうして謝るの？　俺・・・あの時　昇がキスしてって言った時から
ずっと　ずっと待ってたのに（笑）　もう忘れられちゃったのかなぁって
３０になってさすがにもう　大人もいいとこだろ　そう思ってた」
「俺のコーチは　何歳になっても関係ないし」
「・・・そっか・・・」
「愛してる」
「ん」
「それだけかよ」
「ん？若いねぇ昇クン　まだまだ（笑）」
「愛してる」
「ん」

僕は　何度も何度も彼にキスをした
深く甘い　大人のキスを　今度は僕が彼にした
もう離さない　離れない

僕はその懐かしい腕と胸を取り戻した
小学生だったあの日　抱き締められたその腕を
今度は僕が抱き締める
大人になった僕が　彼を抱き締める
ずっと　ずっと

Ｔｈｅ　Ｅｎｄ

１７．もう一度　告白の時（後書き）

お付き合い頂きましてありがとうございました
夏休みにプールに通いながら書きました（爆）
こんな素敵なコーチのいるスクールなら
毎日でも通いたいものです・・・・
ご感想など頂戴できますと嬉しいです
ありがとうございました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7697c/

ウォーターボーイズ

2010年11月28日05時31分発行